

『花屋抄』の注釈態度

——「おさなき人・女達」のために——

中葉芳子

はじめに

著者慶福院花屋玉栄自身によって、跋文で「愚案なれば、名付て『花屋抄』といふ也。」と命名された『花屋抄』は、玉栄六十九歳の文禄三年（一五九四）七月に著されている。花屋玉栄は、『顯伝明名録』に「玉栄 南都比丘尼慶福院近衛植家公息女（尼）」とあり、五摂家の一つである近衛家の出であることがわかる。近衛家は、陽明文庫本源氏物語や二十卷本歌合を所蔵するなど、古典との関わりが深い。玉栄の父近衛植家は、連歌や和漢聯句の会を自邸で主催したり、宗碩・宗牧・宗養・紹巴といった連歌師たちと深い関わりを持っており、文芸活動にも力を入れていた。『源氏物語』に関しては、宗碩から講釈を受けたり、実枝本源氏物語を一帖書写

したりしている。そのほかにも、叔父にあたる聖護院道増や兄弟の昭高院道澄が大島本源氏物語を書写するなど、近衛家の人々と『源氏物語』との関わりは深い。

こうした文化的雰囲気の中で成長した玉栄が、『源氏物語』を讀解するのに必要な教養を身につけていたことは十分に考えられる。その玉栄が、

春の花のおもかけしたふやよひの空の暮かたより、夏は窓を過る螢にもあつめし事をおもひ出るたよりに、此物語を引よせ、まして秋の夕へ、身にしむ色もさま／＼に枯行虫のね、身にかへても惜まるゝ夕の空、心くたくる折／＼の心をなくさめんたより、冬の夜のなかきには、ともし火をかゝけつくして、床ちかき炬のあたりにとりちらしても見まはしくおほす人の、しん

そのもてあそびには、たゞやすらかに、五十四帖の紙面しめん、ふしんなきのみそかんよふならんと、いさゝるの水のなかれにも、やとれる月の影は、ふるき泉いづみにもかはるへからさる物なれば、

おろかなる女とちのために、四帖につゝめ、是をしるし付侍る。と跋文で記しているのは、女友達や子供たちから、自分たちにもわかる『源氏物語』の注釈書がほしい、と依頼されたためであろうか。

当時の『源氏物語』の注釈書は、先行の研究成果を踏まえて作成され、研究者向けのものになっていた。こうした注釈書は、講釈を聴聞しに出かけて行ったり、師弟関係を結んだりすることのできなない女性にとっては、手に入れること自体が難しく、たとえ入手できたとしても、自力で理解することは困難であった。初心者が『源氏物語』を読むためのものではなかったからである。玉栄は、研究とは無縁の立場で、『源氏物語』に親しみたいと思う初心者の「おさなき人・女達」のために、『花屋抄』を執筆したという。

本稿においては、このような意図と性格を持った『花屋抄』の注釈態度を具体的に見ていこうと思う。

一 初心者向けの注釈ということ

『花屋抄』は跋文で、まず、

源氏の注本、紫明・河海・花鳥、此三のみなもとをたゞして、又三源一覽といふ物、ますかゝみのかけあきらかに、うたかひ残らざる物あり。それより後、又さまゞ、人のちゑにまかせ、あみたてたる物おゝし。され共、いつれも我ちゑ、さいかくをあらはすはかりにて、みゝとをき事おゝく、源氏のおもては、あらわれかねたる事共おほし。しよしんのため、およひかたき事とも有。

と述べる。ここで玉栄は、『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』及びこれら三冊を集成した『三源一覽』は評価している。しかし、『花鳥余情』以降の注釈書は、それぞれの著者の学才を示すばかりで、初心者の役には立たないとする。

そこで玉栄は、『花屋抄』を著すにあたって、どのような注釈方法を採用したのであろうか。「おろかなる女とちのために、四帖につゝめ、是をしるし付」けて、「おさなき人・女達のためはかりなれば、まんなをえらみ、いさゝかにもかなをつけ」る、という教育的方法を優先した。注釈の分量を少なくし、表記は漢字を減らして、その少ない漢字にも振り仮名を付けたというのである。確かに、初心者に対しては必要な配慮であろう。しかし、これだけでは、肝心の注釈内容や注釈態度について、どのように考えていたのかが明らかではない。「たゞやすらかに、五十四帖の紙面しめん、ふしんなきのみ

そかんよふならん」と考えていたことしかわからないのである。

では、一般に、初心者向けの注釈書では、どのような配慮がなされているのであろうか。『花屋抄』以前に成立した、初心者向けの注釈書である『源氏和秘抄』を見てみよう。

『源氏和秘抄』は、一条兼良が『花鳥余情』を著す前、宝徳元年（一四四九）に著したものである。この注釈書を著した意図は、跋文に、

抑、河海・水原・紫明など云抄は、事ひろきによりて、初心の人はみる事たやすからず。是によつて、ひとふしある詞の心えがたく侍を、あらく／＼此一帖にしるしあらはして、道に入ものゝなかだてとし侍り。

とあることから、初心者向けに、難しい語句を解釈したものであることがわかる。『源氏物語』を理解することの基本は、語句の解釈にあるという考えからのだろう。

ただ、『源氏和秘抄』は、あくまでもこれから『源氏物語』を研究していこうという人に対する入門書として著されたものであるから、

たゞし、是にきはまれるとおもふべからず。すべて、五十四度のつくりさま・よみやう・口伝・こじつなどは、先達にならずして、たやすくさとりしらむ事は、いとおぼつかなくおほ

え侍り。

（跋文）

と、当該注釈書のみでは不十分だ、とも述べている。「先達にならなければ、「さとりし」る事が難しい、と研究者に師事することを勧めているのである。

それに対して『花屋抄』は、普段から「此物語を引よせ」て、「床ちかき炉かまどのあたりにとりちらしても見まはしくおほす人」が、「しんそうのもてあそひ」として『源氏物語』に親しみたい時に、物語として楽しむために必要な知識を記した注釈書である。『花屋抄』に、本文異同、引歌・典拠となる漢詩文や催馬楽などの指摘、有職故実・准拠などの解説、清濁や読癖、文脈指示といった、研究的な先行の注釈書と共通する注記が見られるのは、そのためだと考えられる。

これは、先行の注釈書が初心者には役立たない、とした跋文と矛盾する注釈内容のようにも思われる。ここで、『源氏和秘抄』の跋文に目を向けると、『河海抄』『水原抄』『紫明抄』などを、「事ひろきによりて、初心の人はみる事たやすからず。」と述べている。それぞれの注釈書をそのまま初心者が用いた場合、研究史を踏まえた注釈を理解することは難しい、というのである。決して、先行の注釈書にある注釈が初心者の役に立たない、ということではない。玉榮が跋文で訴えていたのも、同じ事なのだろう。

『花屋抄』には、先行の注釈書と共通する注記が見られる。これらの注記を詳しく見ていくことが、『花屋抄』の注釈態度を明らかにする一助となるのではないだろうか。

二 『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』との関わり

『花屋抄』は、どういった注釈書の、どのような注釈を取り入れているのであろうか。注釈する際に、依拠した注釈書名を記していないので、それぞれの注記がどの注釈書に拠ったのかを特定することは難しい。ただ、跋文で『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』の良さを認めているのだから、これら三書を中心に行っていると考えるのが普通であろう。これら三書の性格から、『紫明抄』『河海抄』と『花鳥余情』に分けて考えていく。

(一) 『紫明抄』『河海抄』の場合

『紫明抄』は、語句の解釈・出典の考証を主とする啓蒙的な注釈書だとされる。『河海抄』は、故事・出典の考証も多いが、語句の解釈や推敲の考察などに、従来にない新しさと深さが増加しているという。両書とも、注釈の基本を考証に置いているのである。こういった注釈書の性格を反映して、両書に拠ったと考えられる注記には考証が多い。

なお、『花屋抄』の注記の引用に際しては、注記の最後の()内に巻名を記した。また、参考のために、引用した注記の後に「※」を付してそれぞれの注釈書の略称とともに、該当注記が存する頁数を漢数字で掲げ、さらに上下段のいずれに存するのかも合わせて示した。

『紫明抄』『河海抄』は、玉上琢弥編山本利達・石田穰二校訂『紫明抄 河海抄』(角川書店)を用いた。『紫明抄』は「紫」、『河海抄』は「河」と略称する。

1 八重むくらにもさはらす

とふ人もなき宿なれとくる春は八重葎にもさはらさりけり
(桐壺巻)

※「紫」一五上 「河」一九九上

2 見えぬ山路

世のうきめみえぬ山ちへいらんには思ふ人こそほたしけれ
(蓬生巻)

※「紫」七五下 「河」三三六下〜三三七上

3 あひみんことは

引継 春ことに花のさかりは有なめとあひみんことはいのち也けり
(柏木巻)

※「紫」一二八下 「河」五〇〇上

4ぬしなき宿の

引継 うへて見しぬしなき宿の桜花色かはりこそむかしな
りけれ (早蕨巻)

※【紫】一五八上 【河】五六七上

このように、『紫明抄』『河海抄』で指摘されていた引歌が、『花屋抄』においても数多く指摘されている。『花屋抄』で指摘される引歌の多くは、『紫明抄』や『河海抄』で指摘されていたものなのである。

5こよなう

無越と書。…… (桐壺巻)

※【紫】一八下 【河】二〇七下

6大ひさ

大悲者。くわんをんを申也。 (玉鬘巻)

※【紫】九二下 【河】三八八下

7もはら

専なり。 (夕霧巻)

※【紫】一三五下 【河】五一二下

8ぎせい大とく

葦勢大徳。むかしの葦の名人也。 (手習巻)

※【紫】一七六上 【河】五九八下

このような漢字を当てることによる語句の解釈は、『紫明抄』『河海抄』が得意とするところであり、『花屋抄』もこうした注釈方法を取り入れている。初心者には有効な注釈だと考えたのだろう。

『河海抄』に拠ったと考えられる注記には、准拠の考察などの教養的な注記も多く見られる。

9いつれの御時にか

延喜の御代の事を、おほくと、いつれの御ときにか、とかきたるなり。 (桐壺巻)

※【河】一八九上

10みときやうのはしめ

春秋、大はんにやを請せらるゝなり。 (胡蝶巻)

※【河】四〇三上

11律師山こもり

ゑしんのそうつ、千日山こもりせし也。 (夕霧巻)

※【河】五一〇上

12しはすの月夜

……清少納言、すさまじき物にいゝける也。 (総角巻)

※【河】五六三下

こういった教養を身につけるのに役立つ注記を『花屋抄』が記しているのは、「おさなき人・女達」が、『源氏物語』を読むことで、教

養を身につけることも望んでいたからであろう。

13 なさげなき人に

後／＼の国司の事也。

(若紫卷)

※〔河〕二五五下

14 くだに

岩ふちの事也。

(少女卷)

※〔河〕三八一上

15 八の宮

宇治の宮のこと也。あけまきのまきと此ころか、おなし

頃ときこえたり。

(紅梅卷)

※〔河〕五三八下

16 いひおとす

いゝくたす也。

(竹河卷)

※〔河〕五四一下

16の言い換えのような語句の解釈から、13・15の文脈を考えた上で
の語句の解釈まで、『花屋抄』の注記は、『河海抄』のいろいろな形
式の語句の解釈と共通している。特に、13・15のような文脈に即し
た語句の解釈は、『花屋抄』が目的とした「たゝやすらかに、五十
四帖の紙面、ふしんなき」ことととって、重要な役割を果たしてい
ると言える。

(二) 『花鳥余情』の場合

『花屋抄』が目的とした、「たゝやすらかに、五十四帖の紙面、
ふしんなき」ことは、『源氏物語』の鑑賞に支障がないというこ
とである。その点で、『花鳥余情』は非常に役に立ったであろう。

『花鳥余情』は、出典考証よりも、文脈から物語を理解しようとする
鑑賞的な注釈に力を入れているからである。こうした『花鳥余情』
の注釈方法は、跋文からうかがわれる『花屋抄』の著作目的と合致
する。それを裏付けるかのように、『花鳥余情』に拠ったと考えら
れる注記には、文脈理解に関するものが多い。

なお、『花鳥余情』は、『源氏物語古注集成』（桜楓社）所収本を
用い、頁数・段に加えて、項目番号を算用数字で（ ）内に記した。

〔花〕と略称する。

17 忍ひたる所からうして

これ、たれ共聞えぬ人也。

(若紫卷)

※〔花〕五一下(52)

18 かのとけたりし藏人

紀のかみかおとゝ、良清か事也。

(松風卷)

※〔花〕一二九上〜下(36)

19 おなしすち

齋院とけんし、いとこといふ事也。

(朝顔巻)

※〔花〕一三六下(21)

20 うちの御門、御位につかせ給て十八年

かくいふ時か、源氏の四十六也。冷泉院御即位は、源氏

廿八のとしなれば、四十五のとしか十八年にあたるへけ

れとも、あくるとしよりを治世にとりて十八年とかくあ

ひた、源氏四十六にあたる也。……

(若菜下巻)

※〔花〕二四四下(10)

21 よき女の

……かたへはうしなひとあるは、大君の事也。(手習巻)

※〔花〕三四二上(31)

17〜19・21のように、人物を示したり、人物関係についての注記や、

20のように、年立に関する注記がある。

22 かゝるすき事

相人にあはせたまつり給へる事也、と花鳥にあり。

(帯木巻)

※〔花〕二二下〜二二上(2)

23 此御事の

藤つのは御さんの事也。

(紅葉賀巻)

※〔花〕六四上(19)

24 露のかゝらぬ

けんしの御ゆかりにかゝらぬ人かうら山しき、と明石の

君の思也。(松風巻)

※〔花〕一二七上(10)

25 ほからかにあるへかしく

ほからかとは、万事につゐて、いかなる上らうも物に心

うるかたなくては、末のよにも、人にあさむかれぬへし、

といふ事なり。

(若菜上巻)

※〔花〕二二九上(18)

26 それは猶わろき事

思ふ人にをくれて、かなしひのまきれにとんせいするは、

後とをらぬ物なれば、猶わろしとなり。

(幻巻)

※〔花〕二六九下〜二七〇上(21)

27 いとさはあらず

弁は、さかしら心とはなくて、たゝありのまゝにおも

ひ佐たる也。

(総角巻)

※〔花〕二九五上(9)

このように、項目に掲げられた語句の内容を、本文に即して具体的

に示している注記もある。また、

28 わろかんめり

おとこのみるまへにて、女に哥よみかはす事、わろき事、とそらほけていふ也。今ひと声きゝはやすへき人とは、

我身の事也。

(帚木卷)

※「花」三〇下(95)

29 万春楽御口すきひ

たうかの舞人、たちさまに万春楽をうたふ。それを、けんしの口すきひ給也。
(初音卷)

※「花」一六八上(67)

のように、該当する場面の状況を説明する注記もある。

こうして見てみると、『花鳥余情』に拠ったと考えられる注記には、『源氏物語』を物語として楽しむのに役立つような、鑑賞的なものが多いことがわかる。

以上のように、『花屋抄』が跋文で書名を掲げて推奨している『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』に拠ったと考えられる注記は、数多く指摘できる。しかし、これら三書を良いと認めているとは言っても、無批判に注釈を取り入れていたわけではない。

30 藤中納言

是を河海には、ひげ黒の子とあれ共、それにては有へか

らす。たゝ、かやうの事は誰にてもそあるらん、と大やうにみるかよしと也。よみ人しらすの歌におなし。

(手習卷)

※「河」五九七上

31 竹のこのよのうきふしを

此ことは、花鳥には、女院の御事にやとあり。さやうにはきこえ侍らす。たゝ、むらさきの上の御事までに、このことはゝきこえたり。……
(蓬生卷)

※「花」一一六上(2)

『河海抄』や『花鳥余情』の説を、書名を掲げて引用し、否定している。『河海抄』や『花鳥余情』が述べているからといって、全面的に信用し、盲従していたわけではないのである。玉柴には玉柴なりの解釈があつて、それを基準に『花屋抄』の注記内容を決めていたことがうかがわれる。

残念ながら、『紫明抄』の説を書名とともに引用しているところはない。しかし、『紫明抄』についても、『河海抄』や『花鳥余情』と同様の態度で臨んでいたと考えてよいだろう。

三 『源氏和秘抄』『弄花抄』『細流抄』との関わり

『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』が、跋文での評価に違わず、

『花屋抄』の注記と深く関わっていることがわかった。それでは、この三書以外の注釈書に対する扱いはどうであろうか。『花屋抄』とは初心者向けの注釈書という共通点を持つ『源氏和秘抄』と、当時の源氏物語研究の主流であった三条西家の『弄花抄』『細流抄』を取り上げてみよう。

(一) 『源氏和秘抄』の場合

先にも述べたように、『源氏和秘抄』は、『花鳥余情』と著者が同じである。また、初心者向けということで、語句の解釈を注釈の中心にする。そのため、『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』と一致する注釈が多い。『花屋抄』と共通する注釈にも同じ傾向があるが、『源氏和秘抄』とのみ共通する注記もある。

なお、『源氏和秘抄』は、「和」と略称する
1 えひそめの

紫にあかみのある也。

(末摘花卷)

※「和」四〇二上
2 えいまき

服者は、かぶりのえいをまく也。

(葵卷)

※「和」四〇五下

3 うんりん院

いまのむらさき野の事也。

(賢木卷)

※「和」四〇六下

4 なりたかしなりやまむ

おとなせそ、と也。

(少女卷)

※「和」四一一上

5 ほそびつ

衣ひつなり。

(野分卷)

※「和」四一五上

このように、『源氏和秘抄』の性格上、『花屋抄』の注記と共通するものも簡単な語句の解釈ばかりなので、『源氏和秘抄』に拠ったとは言いい切れない。

(二) 『弄花抄』『細流抄』の場合

『弄花抄』と『細流抄』は、当時の源氏物語研究の主流であった三条西家に関わる注釈書である。『弄花抄』は、牡丹花肖柏の「源氏聞書」をもとに、三条西実隆が増補したものであり、実隆の源氏物語研究の出発点と言える注釈書である。また、三条西家の源氏学や室町期の研究を知る上で重要なものである。

なお、『弄花抄』は、『源氏物語古注集成』所収本を用いた。「弄」と略称する。

6世にもほきたる

ほれたるといふやうの事也。……

(常夏巻)

※「弄」一三二下(41)

7右大将大納言に

夕きり也。

(若菜下巻)

※「弄」一七五上(37)

8過にし御事

柏木の死たる事。

(夕霧巻)

※「弄」二一四下(180)

9何はかりのしそく

何ほとのしんるいそ、といふ心也。

(浮舟巻)

※「弄」三〇三上(37)

このように、『弄花抄』と共通する注記には、簡単な語句の解釈や人名指示が多い。『源氏和秘抄』と同様、必ずしも『弄花抄』に拠ったと考える必要はないかもしれない。

それでは、『細流抄』はどうであろうか。『細流抄』は、実隆が『弄花抄』作成後に著したものである。三条西家は、『細流抄』を秘伝書として秘蔵していたようだが、『細流抄』は室町後期以降の源氏物語研究に大きな影響を与えている。

なお、『細流抄』も、『源氏物語古注集成』所収本を用いた。〔細〕

と略称する。

10むくくしき

おそろしき事也。

(夕顔巻)

※「細」四八下(227)

11いまきさき

こうきてんの御事也。

(葵巻)

※「細」八六下(7)

12人には

けんしには、との事也。

(掃標巻)

※「細」一三八上(13)

13こたみは

このたひは、なり。

(絵合巻)

※「細」一五六上(52)

14式部卿の宮

紫上の御父なり。

(若菜下巻)

※「細」二九二下(391)

このように、『花屋抄』と『細流抄』とが共通する注記にも、『弄花抄』と同様の傾向が見られる。

以上のように、『花屋抄』の注記には、『源氏和秘抄』『弄花抄』

『細流抄』とも共通するものが見られた。ただ、これら三書と共通していた注記は、簡単なものが多く、必ずしもこれらの注釈書に拠ったと考える必要はないかもしれない。玉栄は、『源氏物語』を読み解くのに十分な教養を持っていたと考えられるのだから、玉栄自身の理解を示したただけとも考えられるからである。

ただし、『細流抄』の場合は、

15 あなうたて、誠にみつからのにもこそ

返哥のてい、わざとすちともなくよみて中納言かきたれは、まことに女御のよみ給へるか、と人のおもはん、と女御くるしかり給ふなり。

(常夏巻)

※〔細〕二二三下(194)

16 かた／＼におはしましては

……中宮の御里出の御座所、東のたいなれば、紫上それにて待うけ奉り給へるを、はやつねのかたへ帰り給は、中宮と別／＼にまし／＼ては、中宮のあなたにわたらせ給はんも、さい／＼はひんなし。紫上のまいり給はん事も、わつらひ給へは、かなふましければ、しはし、まつ紫上、東のたいに中宮とひと所にまします、と也。

(御法巻)

※〔細〕三三七上(29・32)

といった、かなり詳しい注記と共通することがある。このような文脈理解を助ける、鑑賞的な『花屋抄』の注記と『細流抄』の注記とが共通するということは、玉栄が『細流抄』を参考にしていたことを示しているのではなからうか。

玉栄は、先行の注釈書を、自分の手に入る範囲内ではあろうが、入手して『花屋抄』の著述に役立てていたと考えられる。しかしその方法は、いわゆる諸注集成のように、先行の注釈書の説を引用して自説を展開するのではなく、出典を示さずに、自分の理解として説明するという方法であった。これは玉栄が、先行の注釈書を理解し、それらを自分自身の解釈として深めて、自家彙籠中のものとしていたことを表わしている。

だからこそ、玉栄は、「さま／＼、人のちゑにまかせ、あみたてた」、「我ちゑ・さいかくをあらはすばかり」の先行の注釈書を批判していたのである。初心者か、膨大な源氏物語研究の集積を示されても、「み／＼とをき事お／＼、源氏のおもては、あらわれかねたる事共おほ」いは当然であろう。「しよしんのため、およひかたき事」であるのも、その通りだと考えられる。

玉栄は、当時の源氏物語研究の主流であった三条西家の注釈書など、手に入れられるものは手に入れて、自分自身の源氏物語研究には用いていたのだらう。しかし、『花屋抄』の中で、それら先行の

注釈書を出典として示すことはしていない。先行の注釈書の説を自分の理解として、「おさなき人・女達」に示す、この『花屋抄』においては、出典名を明記する必要がなかったのであろう。こうした注釈態度にも、初心者を対象とした『花屋抄』の性格が表われている。

四 注釈態度の独自性

今まで考察してきた通り、玉栄は先行の注釈書を勉強して、初心者に必要な注釈を選んで取り入れたり、参考にしたりしながら、あくまで自分の立場から著述していた。そうした、玉栄独自の注釈態度がうかがわれる注記を見てみよう。

1 まうと

つねのことはに、御へんなどいふことは也。(帶木卷)

2 しほち

……はしめて出家したるを、いまの世にもしんぼち、といふなり。(若紫卷)

3 世にもほきたる

……世俗に、うつけたるなと、いふころ也。(常夏卷)

4 にぶきやう侍りなんや

にぶきは、つねに云詞也。……(幻卷)

このように、当時の日常語を用いることで、語句の理解を容易にしようとしていたことがうかがわれる。

また、先行の注釈書でさまざまに考証されている語句に関しては、

5 三つか一つ

三ヶの大事の一つにて、さま／＼のちうあれば、をろかなる筆にあらはし侍りかたし。たゞ、つねにかる／＼と人の申やうに、十四のしの字をいまひ給て、三つかひとつとの給へる、と心得給ふへき也。(葵卷)

6 とのるものゝふくろ

是も源氏の大事とあれば、さたしかたし。され共、あまりふかく物を思へは、とをきやうなり。たゞうちまかせて、あさ／＼と心得たるもよき也。むま・車もなく、まいる人すくなければ、御とのる申もまれに成て、とのるものゝふくろもみえぬ、といふ心也。(賢木卷)

7 いまはれうじうけさせん

これにさま／＼のだんぎあり。をろかなる人、かつてんすましき事也。かる／＼とせん的事はかり、こゝにはかき侍る也。大かくれうに入て、かくもんを心みする事也。れうしとは、寮試れうじとかく。試は、心こゝろ也。此心みにて、かくもんのすくれたるとをろかなるとをしる也。

8 すいはん・はすのみ

(少女巻)

此二色、さま／＼の説あれと、たゞありにかる／＼と心得給へし。すいはんは、水つけのぐ、御はすのみは、蓮ついでの突た也。

(手習巻)

のように、諸説があるとは述べるものの、結論となる解釈は一つに絞っている。特に、5の「三つか一つ」と6の「とのみものゝふくろ」は、三箇の大事として秘伝とされ、先行の注釈書においては、口伝などの形で、特別扱いされてきたものである。しかし、『花屋抄』では、先行の注釈書とは異なり、これらの語句の解釈を秘伝扱いにすることはない。秘伝を始めとする諸説は、物語の鑑賞には必要ないという考え方に立って、あくまでも自分の見解を伝えるという態度を採っているのである。

このように、解釈を一つに絞ることは、文脈理解の注記でも見られる。

9 その中にすこしたかひめ

此ことはを、さま／＼に注して侍れ共、たゞこれは、源氏、藤つはへ密契みひめの事か、うらのおもてにたかひめあるやうに出たれば、つゝしませ給へ、と申ける成へし。

(若紫巻)

様々な解釈が存するからといって、それらをすべて挙げれば、初心者ほどに抛ればよいのかわからずに混乱するだけである。玉栄が『花屋抄』で、諸説があると述べながら、それらを記することがないのは、初心者に対して自分の見解を示すことを第一にしている、この『花屋抄』の性格によると考えられる。

以上見てきたように、『花屋抄』は、語句の解釈に当時の日常語を用いたり、諸説のある解釈も一つの解釈だけを示したりしている。こうした注釈方法を採っているのは、自分の理解をもととして『源氏物語』を解釈していくことを、『花屋抄』が基本としていたからである。これは、講釈の際に採られている方法だといえる。要するに、玉栄は『花屋抄』を著すことで、初心者向けの講釈をしてみせたのだ。

最後に

「おさなき人・女達」が玉栄に対して、自分たちにもわかる『源氏物語』の注釈書がほしい、とでも言って依頼したのだろうか。玉栄は、『花屋抄』という、それまでの注釈書とは全く違ったものを作りあげた。初心者、それも『源氏物語』を物語として鑑賞し楽しみたい「おさなき人・女達」向けの講釈とも言うべきものを、紙に書き著したのである。これならば、外出の難しい女性でも、『源

氏物語』の講釈を簡単に「聴聞する」ことができる。

玉栄は、先行の注釈書を手入して勉強していた。そして、講釈のための講義資料を作っていたとは考えられないだろうか。この資料は、他の注釈書と同じように、先行の注釈書の説を集成したものであっただろう。しかし、『花屋抄』作成に際しては、その資料をそのまま用いることはせず、自家菜籠中のものとして自在に使いこなす、玉栄自身の解釈として示したのだ。

こうした注釈態度を採ったのは、玉栄が『花屋抄』を、『源氏物語』講釈の紙上版と考えていたからだろう。そしてこれが玉栄の考えた「おさなき人・女達」のための注釈書なのである。

注

(1) 『花屋抄』の引用は、名古屋市蓬左文庫所蔵本に拠り、必要に応じて関西大学図書館所蔵本を参照した。関西大学図書館所蔵本の本文は、傍らに()を付して示している。なお、引用部分には私に句読点を付したが、濁点は底本に存するもののみ施した。

(2) 『頭伝明名録』の引用は、日本古典全集に拠る。

(3) 木藤才蔵『連歌史論考 増補改訂版』(明治書院 平成五年)

井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期 改訂新版』(明治

書院 昭和六十二年)

(4) 『尚通公記』永正十七年(一五二〇)八月十二日の条に拠る。

(5) 『実隆公記』享祿二年(一五二九)七月廿六日の条に拠る。

(6) 大島本源氏物語の桐壺・夢浮橋巻の奥書に拠る。

(7) 『源氏和秘抄』の引用は、中野幸一編『源氏物語古注釈叢刊 第二巻』(武蔵野書院)に拠る。句読点・濁点は、私に付した。

(8) 拙稿『花屋抄』の本文意識——関大図書館本の紹介を兼ねて——(『国文学』(関西大学) 第七十九号 平成十一年九月)で、本文異同に関する注記については既に述べた。

(9) 岩坪健『源氏物語古注釈の研究』(和泉書院 平成十一年) 第五編

〔付記〕前稿に引き続き、貴重書の閲覧を許可してくださいました名古屋市蓬左文庫・関西大学総合図書館に、御礼申し上げます。

(なかば よしこ/本学非常勤講師)